

りたり。

黄教の勃興と改正の要點

明の永樂十五年（千七百四十四年）宗喀巴ツォンカバなる者、甘肅省の西寧府に生る。資性頗る慧敏なり、年甫めて十四、西藏に赴き、紅教を薩迦廟サカカに學び、得道大悟、其の流弊を看破し、座視するに忍びず、慨然救世主を以て自ら任し、純粹なる佛教の眞理に因りて、自ら一派を開き、紅教の外に獨立したり。即ち喇嘛教の一新紀元にして、是れ實に黄教の開祖たり。

宗喀巴の紅教改正を斷行するに方りてや、一日衆を會し、自ら黄色の衣冠に換へ衆に告ぐるに、教主なる者は、世々轉生して、人民を濟度すべきを以てしたり。其の紅教改正の要點を擧ぐれば三あり。一は衣帽の紅色を黄色に換へたること、二は咒語を改めたること、三は教主の衣鉢を其の子に傳ふるを罷め、轉生兒を指定して之に傳ふることとせし是なり。

黄教の教祖、宗喀巴に二人の大弟子あり。一を達賴喇嘛ダライラマと云ひ、一を班禪喇嘛パンチヤンラマと稱す。達賴とは蒙古語大海の義、智慧大海の如きを謂ひ、班禪とは西藏にて、パンチヤンリンポチエパンチヤンリンポチエとも稱へ、智識或は文學、寶珠の意なりと云ふ。達賴、班禪は共に